

## 『山家集抄』の入れ木

はじめに

讃岐国来光寺の僧固淨の編になる「山家集抄」は、その外題通り西行の「山家集」の注釈書で、天明四年九月の太田文友等の序文、天明七年二月十六日の麦中齋桐谷誌の序巻跋、及び天明七年五月十一日の藤原高尹の跋文を備え、寛政七年春に京都の風月荘左衛門・吉田四郎右衛門の相版で出版された。もっとも「山家集」の注釈書とはいえず、「西行家集」「新古今集」「夫木抄」「御裳濯河歌合」「宮河歌合」「新勅撰集」「続後撰集」「新拾遺集」「千載集」などから加増された歌も少なくはなく、四季歌計七百八十二首を収録する。

平成十七年六月、奈良大学が京都の竹苞楼（現竹苞書楼）から譲り受けた約二千五百枚の板木の中に、この「山家集抄」の四丁張りの板木三十三枚が含まれていた。詳しくは後述するが、版本と対校してみると、失われた板木は十九枚と考えられ、全体の約六割が残った計算になる。それらの板木を眺めていると、従来の概念では理解出来ない

極めて興味深い入木が認められる。

一般に入木というと、「版木製作後に訂正が必要になった場合、版木の一部を削りとって、新たにその部分に小片を埋め込み、補刻すること」（平成十一年岩波書店刊『日本古典籍書誌学辞典』「入れ木」の解説）というふう捉えられがちである。が、「入れてから彫る」のではなく「彫ってから入れる」のが実態であったと考えられることは、かつて拙稿（奈良大学総合研究所特別研究報告書「板木二題」平成十四年三月）で指摘した。その稿は京都の藤井文政堂現蔵・旧蔵の板木約千二百枚と奈良の大仏殿前の絵図屋筒井家の板木百二十枚余の調査報告として纏めたものであったが、その後竹苞楼の板木の調査を進めるにつれ、「彫ってから入れる」のが実態であったことについての確信を深めるのと同時に、入木は「版木製作後に訂正が必要になった場合」だけにするのではなく、他にも実に多様なやり方があることが判って来た。現存「山家集抄」の板木はそ

永井一彰

の入木の多様性の一斑を如実に示してくれる史料なのである。

そこでこの稿では、「山家集抄」の出版に至る経緯を押さえた上で、入木を含め残存板木の状況を報告し、近世出版工房の作業工程の問題に踏み込んでみることにしよう。なお、以下の論中で「山家集抄」からの引用文には、私に句読点・濁点を付した。また、版本・板木から採った図版は一括して巻末に掲げてある。板木の図版は、判り易いように鏡面で示した。

一 版本書誌

先ず初めに、奈良大学蔵本によって、「山家集抄」版本の書誌について述べておく。半紙本五冊。229×162耗。浅緑色龍紋空押し元表紙。綴糸、薄藍色（後補か）。五冊とも双边白地元題簽で、それぞれ次のようにある。「増／補山家集抄 西行聖人傳／序凡例 一」「増／補山家集抄 春上中 二」「増／補山家集抄 春下／夏全 三」「増／補山家集抄 秋上中 四」「増／補山家集抄 秋下／冬全 五」。表紙については一冊めのそれを図版1に、題簽は五冊全てを図版2に示してあるのでそれぞれで御覧いただきたい。本文は、板芯上部に書名を、下部に○印を添えて丁付を入れる。これを一覧にして示すと、次のようになる。

冊数 板芯上部の標示

一 山家和歌集抄序

板芯下部丁付

〇一、〇二

	山家和歌集抄	〇三〓〇卅四
二	(空白)	(目録) 〇一
	山家和歌集巻一	春上 〇二〓〇十八終
	山家和歌集抄	(目録) 〇
	山家和歌集抄二	春中 〇一〓〇十九
三	山家和歌集抄	(目録) 〇
	山家和歌集抄三	春下 〇一〓〇十四
	山家和歌集抄	(目録) 〇
	山家和歌集抄四	夏 〇一〓〇十九
四	山家和歌集抄五六目録	〇
	山家和歌集抄五	秋上 〇一〓〇十一
	山家和歌集抄六	秋中上 〇十二〓〇廿五
	山家和歌集抄七目録	〇
	山家和歌集抄七	秋中下 〇一〓〇十六
五	山家和歌集抄八目録	〇
	山家和歌集抄八	秋下 〇一〓〇廿三
	山家和歌集抄九目録	〇
	山家和歌集抄九	冬 〇一〓〇廿六
	山家和歌集抄跋	〇

冊一は序巻で、「山家和歌集抄序」(天明四年九月中旬太田文友等書)

「西行法師贊」(艸蘆龍公美述)「西行聖人伝」(不可思議撰深草元政上人

也)〔西行伝〕「諸伝異考」「いつはりを伝たる事」「実伝たるべき事」  
 「系図并ニ墓所の事」「聖人俗位并法号の事」「聖人と称する事」「聖人の和訓并通難」「歌堪能の事并師とすべき事」「西行上人和歌風体事」  
 「歌の徳の事」「撰者の事」「題号の事」「聖像を造れる事」「歌教の事」  
 「諸抄の評」「凡例」「依実録追加考補伝」「山家和歌集抄印刻序巻跋」  
 (天明七年二月十六日麦中齋桐谷誌)を収録。以下、冊二から冊五の  
 四冊に四季別に西行詠歌とその注釈を収め、冊五終丁の天明七年五月中旬藤原高尹誌の跋文末尾に

西行聖人六百年忌正當

風月 莊左衛門

寛政七乙卯春新刻

吉田四郎右衛門

と刊記を入れる。

いま巻別に「目録内題」「抄文内題」「本文内題」を一覧にしてみると、次のようになる。

巻数	目録内題	抄文内題	本文内題
巻一	春歌上	七十八首 たつ春の巻	春上
巻二	春部巻中	花の巻上 五十七首 まつ花の巻	春歌中
巻三	花の巻下	ちる花の巻 八十二首 春歌下	
巻四	夏部歌	(歌数不記) 衣がへの巻	夏歌
巻五	秋歌上	六十首 初秋の巻	六十首 秋歌上

巻六	秋歌中	月の巻上	八十首	ゆふ月よの巻	八十首	秋歌中之上
巻七	月の巻下	六十七首	月のまき下			秋歌中之下
巻八	秋歌下	(歌数不記)	はつ雁のまき			秋歌下
巻九	冬歌	(歌数不記)	初しぐれの巻			冬歌

歌数を記す巻とそうでない巻があるが、記している巻も必ずしも正確ではなく、実数をかぞえてみると、巻一が七十七、巻二が九十七、巻三が八十二、巻四が百十、巻五が六十、巻六が八十、巻七が六十七、巻八が九十八、巻九が百十一で、合計七百八十二首。次に本文の版式であるが、匡廓は巻一のみ四周単辺。他はすべて、左右の匡廓が双辺。また、巻一は匡廓の縦がやや長い。おそらくその版式と関係するのであろうが、行数も巻一のみが半丁十八行で、他は十七行となっている。次に版下であるが、巻一と巻二・三・四とはやや印象が違う(巻一は整い、二・三・四は崩れた感じ)ものの、同筆と見られる。巻五・九(含、跋文)は一筆で、巻一・四とは別筆。序巻は文字が小さく、はつきりとは判らないが、巻一・四と同筆のように思われる。以上版式については、**図版8・9・10**を参照されたい。因みに、各巻冒頭部の目録の形式も、巻一・四の春・夏の部は文字が小さく、巻五・九の秋・冬の部は文字が大きいという違いがあることも注意しておきたい。なお、国文学研究資料館から取り寄せた紙焼き写真によれば、表紙の色・模様は不明ながら、今治市河野美術館蔵本「山家集抄」も半紙本五冊で、五冊とも元題簽があり奈良大本と同版。本文も同じで、

同版である。

## 二 残存板木一覽

さて、残存板木三十三枚を一覧にしたものが表Iである。版本と対校してみると、網掛けで「欠」とした板木が失われていることが分かる。失われた板木の仕立て方を推測してみると、「欠2」の序19、22、「欠5」の卷三5、8はそれぞれ四丁張り一枚。「欠1」の序1・2は、「欠3」の序33、「欠4」の卷二19と組み合わせて一枚であったと思われる。「欠8」の卷八目録と1、23の合計24丁が六枚。「欠9」の卷九目録と1、23の合計24丁が同じく六枚。「欠6」の卷七目録と1、9の10丁及び「欠7」の卷七12、16で合わせて15丁になるので、これで四枚。失われた板木は合計十九枚であったと推測される。したがって、もともと揃いの板木は全部で五十二枚であったということになる。丁の収め方は概ね順番であるが、板木番号242・619のように意図的に丁の順番をばらした板も散見する。なお、題簽の板木は板木番号245に巻一の17・18丁と共に仕立てられているが、**図版3**に拓本で示したように、管見版本と一致する五枚一組と、「増補」の角書を持たない五枚一組、それに合冊用かと思われる単独の一枚が用意されている。普通に考えれば「増補」の角書を持たない題簽が先行するはずで、この題簽を貼った版本の存在も想定されるが、未見。後述するように、「山家集抄」は予定より大幅に刊行が遅れたという事情があるので、

二種の題簽はそのことと関係があるのかもしれない。

## 三 板木の伝来

さて、先にも見たように「山家集抄」は寛政七年春に風月莊左衛門と吉田四郎右衛門の相版形式で出版されたものであった。それがいつどのような経緯で竹苞楼へ動いたのかはよく判らない。が、「禁秘御鈔階梯」(滋野井公麗著、安永五年奥)の板木が「滋野井家御藏板京都二條通富小路東江入北側書林吉田四郎右衛門」と彫りこんだ刊記の板も含めほぼ揃い(四丁張り四十二枚と二丁張り二十七枚)で、また吉田四郎右衛門が吉田屋新兵衛らと刊記部に名前を連ねる「獅子巖和歌集類題」(湧蓮著、吉田元長編、文化十三年刊)の板木十枚ほどがやはり竹苞楼に伝わって来たことを思うと、竹苞楼の「山家集抄」の板木は吉田四郎右衛門から譲り受けたものではなかったかと推測される。その時期については不明であるが、幕末近いころのものと思われる竹苞楼の記録「竹苞楼藏板員数」に「山家集抄 四丁張廿四枚 相合 三軒之二軒分」と、また明治七年三月の「板木分配帳」に「山家集抄 四丁張廿四枚」とあり、「廿四枚」という数字は現存枚数三十三とほぼ一致する。さらに明治十六年の「藏板仕入簿」の「山家集抄」の項には次の付箋がある。

表 I 「山家集抄」残存板木一覧

板木番号	巻数	収録丁数	寸法(丈・幅・厚さ) 耗
68	序	3・4、5・6	745×193×15
247	序	7・8、9・10	743×192×19
25	序	12・13、11・14	776×194×19
757	序	15・16、17・18	739×195×15
242	序	25・26、32・34	776×195×18
253	序	29・30、28・31	777×194×18
19	一	1・2、3・4	765×192×22
840	一	5・6、7・8	753×198×20
246	一	9・10、11・12	746×197×18
250	一	13・16、14・15	755×195×22
245	一	17・18終、題籤3種	750×197×22
266	二	目録、3丁分白板	731×194×19
254	二	1・2、3・4	727×183×18
249	二	5・8、6・7	744×193×18
212	二	9・10、11・12	729×189×18
839	二	13・14、15・16	731×190×18
63	三	1・2、3・4	728×189×19
28	三	9・10、11・12	732×187×18
60	三・二	13・14、巻二の17・18	745×193×18
256	四	1・4、2・3	730×200×16
248	四	5・8、6・7	728×192×18
293	四	9・10、11・12	745×194×19
170	四	13・14、15・16	745×193×19
65	四	17・18、19・白板	733×193×19
53	五	巻五・六の目録・1、2・3	738×198×19
62	五	4・5、6・7	737×194×18
837	五	8・9、10・11	738×194×19
255	六	12・13、14・15	743×194×20
257	六	16・17、18・19	747×197×16
20	六	20・21、22・23	743×193×18
258	六・序	24・25、序巻23・24	742×195×20
619	七・序・四	巻七の10・11、序巻27、巻四目録	730×190×19
838	九	24・25、26・跋	722×200×17

大正五年七月板木調

山家集抄 天地五寸五分

外題 増補山家集抄 五本

山家集抄 五本

一本外題 一本

(一) 一ヨリ十八迄(終)

(二) 一ヨリ十八迄

(三) 一 二 三 四 九 十 十一 十二 十三 十四

(四) 一ヨリ十九迄(終)

(五) 五六目録 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十

十一

(六) 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九

廿 廿一 廿二 廿三 廿四 廿五(終)

(七) 十一

(九) 廿四 廿五 廿六 跋

序巻の分について記さないのは不審ではあるが、その他の巻についてこれを先の残存板木一覽表と対照してみるとほぼ一致し、「欠2」の一枚を除く「欠」の板はもともと竹菴楼にはなかったことが判明する。序巻の分はたぶん記載洩れで、大正五年当時やはり竹菴楼の手許にあつたのであろう。竹菴楼は幕末近い頃までに「山家集抄」の板木五十二枚のうち三十四枚を買い取り、それを「三軒之三軒分」として

もう一軒の本屋と「相合」で所持していたが、大正五年以降「欠2」の板一枚がおそらくは虫損のため失なわれ、現在に至つたのである。

#### 四 成立

固浄が何時頃からこの書の編集に取り掛かつたかははっきりしないが、巻七の奥に「秋巻天明三卯師走十日より始て、元旦にも是をかくとて、古人の心をくみてしるさんと先若水を硯にぞする。同辰正月七日此巻注し卒ぬ。」とあり、天明四年一月には秋の巻まで筆を進め、そして巻九の奥に「此四季の巻々こそぞの長月より天明四年辰の今年閏正月上旬までに清書之ヲ卒ヌ。」と記すところによれば、天明四年閏正月上旬には清書は完了していた筈で、それに合わせて太田文友等の序も同年九月には調えられたのであつた。が、何かの事情で刊行に取り掛かるのが遅れたものらしく、巻九に添えられた藤原高尹の跋は天明七年五月となつてゐる。そしてさらに刊記によれば、出版は大幅に遅れ、八年後の寛政七年春にずれ込んでしまつたのである。この間の事情については、巻一の奥に固浄は次のように記す。

天明七丁未の夏書林へ請とりて梓を催せしが、同申の正月晦都の大火に此抄も類焼と聞ゆ。さは西聖人の本意にかなはずせしならん、さればとて別に写貯し本もなければ、連年の功も夢となりぬ。病身再び抄せん力もなく、かくて止なんと思ふに、同じ秋の

比、序巻と秋冬の部残て待しとて頻に再著をこはる、ま、既に大都の回録に小冊の、こりしは夏加もやと覺て、同十一月春の巻を舛し、今酉閏六月に夏の巻を功を卒て槐市へ送る。今年正しく聖人六百年忌に当れり。誠に時至り待るにやと悦て筆を闇くものならし。

つまり、天明七年夏から出版に取り掛かったのであるが、同八年正月の京都大火で『山家集抄』も類焼し、一度は出版を断念したものの、八年秋に序巻と秋・冬の部が残っていることが判明し、書林に乞われるまま、八年秋に春の巻を、西行六百年忌に当たる寛政元年閏六月に夏の巻を「再著」して槐市（ここは書林の意か）へ送ったのだという。「此巻、京にて焼失之間、天明八年申冬重て考「諸書」記之。明春聖人六百年忌正当たる二より、為「追善報恩」急々書集之。応「三所誤多、有」之。後の君子、是を正し給へ。」（巻二奥書）「西聖人遁世の前年京大火、亦六百年忌の前年に大火、此巻焼失して重て著述す。酉年閏六月二日書之於京師ノ旅館。」（巻三奥書）「此巻閏六月六日固浄書之卒。」（巻四奥書）とあるのも、春夏の巻「再著」の経緯を記したものの。これらの奥書からは、焼けたのが清書原稿なのかそれとも板木なのか分かりにくい、先にも触れたように春夏の部と秋冬の部とは版下の筆跡が替わっていること、冒頭部の目録の形式が違うことからして、焼けたのは板木であったと考えてよからう。つまり、『山家集抄』は天明七年末もしくは八年春を目途に出版の準備が進められ板木

も彫刻済みであったのだが、八年正月の大火で春夏の巻の板木が焼け、固浄の「再著」を経て寛政元年閏六月以降にその分を補刻し、出版の段取りを整えたことになる。なお、図版11に示したように、刊記部の年記「西行聖人六百年忌正當／寛政七乙卯春新刻」の二行目「春」は明白な入木、「七乙卯」も入木と認められる。一行目に「西行聖人六百年忌正當」と彫つてあることからすると「七乙卯」のところは、最初「元己酉」とあった筈。その刊記を持つ版本の存在も想定されるが、寛政元年に板木は彫刻済みであったものの大火後の混乱もあって出版が大幅にずれ込み、寛政七年の実際の刊行時に刊記部を触つたと今のところは考えておきたい。

## 五 「山家集抄」の入木

### 1 本文の入木

ではここで、話を本題に戻そう。この稿の目的は『山家集抄』の板木を手掛かりとして入木の多様性を見ることであつた。「版木製作後に訂正が必要になつた場合」の入木はもちろん『山家集抄』本文にも認められる。特に目新しいことでもないが、例を挙げておこう。図版4は板木の残る巻四の11丁裏。図版5はその右上の部分を原寸で示したものである。「水無瀬川をちのかよひち水みちて船わたりする五月雨の頃」の歌の抄文6行目と7行目の間に窮屈に入っているフリーズが入木であることは、版本を見ただけでも明白。入木部分を（ ）で

示し前後の文を挙げてみると、「上に名所を出し、下を五月雨の頃と〔留〕たり。五月雨の頃と」いふに心を付べし。よく其頃をよめり」とある。入木部分があつたほうが文意は自然で、おそらく固淨の清書原稿にはそのようであつたものを、「五月雨の頃」というフレーズが重複するため目移りがして、版下で誤つたのであろう。板木彫整後そのことに気付き、入木で修正したのである。図版6は板木の残らない巻九の15丁裏の一部。これも原寸で示したが、図版4行目〔大御門ノ南烏丸〕、さらにその4行後〔仁壽〕の〔壽〕の部分が入木と見られる。かような所謂「版木製作後に訂正が必要になつた場合」の入木が板木残存の範囲で先の刊記部も含めて三十七箇所、板木の残らない範囲で五箇所認められる。

## 2 合印の入木

さて、「山家集抄」では抄文の歌の見出しに図版8（巻一の11丁裏、図版9（巻六の12丁表）に見られるような数種の合印を使用している。この合印は、序巻の凡例によれば次のような標示である。

- 一 一部分の錯綜せるをば、深き謂もあるべきかと大かたは其ま、置なり。尤歳暮歌中に紅葉一首あり。紅葉歌中に恋一首まじれり。これらの類を改正し、或は類によりて雑中より四季部へ改入しは、皆中の印を附。
- 一 △の印を付するすは、勅撰の集に入し歌の印なり。

- 一 ○の印は加増の歌なり。上に玉を拾ふと云、これなり。
- 一 ☆の印は考べき歌、又しれがたきことの印なり。傍にイ何と付しは、古本に異考せしなり。

なお、この凡例には記されていないが、図版8・9にも出る△印も多用され、これは凡例に言うような注を必要としない歌の標示である。また、数としては多くはないが、所々に語釈の標示として○印（図版9参照）も使われる。以上、△☆○印△○6種の合印を版本で拾つてみると、序巻を除き巻一〜巻九で合計八百四十四箇所にあつて、そして興味深いのは、残存板木についてこれらの合印を調べてみると、もともと彫りこんである箇所と後で入木処理をした箇所とがあり、しかもそれが巻によつてはつきりと分かれているということである。先に図版8・図版9として示した巻一の11丁裏、巻六の12丁表の該当箇所の板木写真を御覧いただきたい。図版12が巻一の11丁裏で、ここに出る合印は下段の拡大写真からもお分かりのように、すべて入木である。それに対し、図版13の巻六の12丁表の合印は入木ではなく、もともと彫りこんだものである。残存板木の合印の入木の状況について、これを表IIとして一覧表にしてみよう。

表の欄外に集計しておいたが、巻一〜四までの合印はもともと彫りこんであるのが十六箇所、入木処理が三百六十二箇所。一方、巻五〜九はそれとは反対に、入木処理が十一箇所、もとの彫りこみが百四十一箇所となつてゐる。その数量から考えて、巻五〜九の合印の入



表Ⅱ 『山家集抄』残存板木の合印一覧

\*数字は合印の数 \*各欄左の網掛けが入木 右は彫りこみ

板木番号	卷数	丁付	△	☆	☺	守	△	○	
19	一	1		2				1	1
19	一	2		2					
19	一	3	■	2					1
19	一	4	■			■			1
840	一	5	■				■		2
840	一	6	■					■	
840	一	7	■		1		■		1
840	一	8	■			■	■		
246	一	9	■						
246	一	10	■			■			
246	一	11	■			■	■		
246	一	12	■						
250	一	13	■				■	■	
250	一	14	■	1					
250	一	15	■	1					
250	一	16	■						
245	一	17					■		
245	一	18	■						
254	二	1	■				■		
254	二	2				■	■		
254	二	3					■		
254	二	4	■				■		
249	二	5		■		■			
249	二	6	■			■	■		
249	二	7	■						
249	二	8	■				■		
212	二	9	■						
212	二	10	■						
212	二	11	■				■		
212	二	12	■			■		■	
839	二	13		■		■			
839	二	14				■			
839	二	15	■			■	■		
839	二	16	■			■	■		
60	二	17	■			■		■	
60	二	18				■	■	■	
63	三	1	■				■		
63	三	2	■						
63	三	3	■				■		
63	三	4	■						
28	三	9		■		■	■		
28	三	10				■	■		
28	三	11	■			■			
28	三	12	■			■	■		
60	三	13	■				■		
60	三	14	■						
256	四	1	■				■		
256	四	2	■				■		
256	四	3	■						

板木番号	巻数	丁付	△	☆	☉	⊕	△	○	
256	四	4	■						
248	四	5	■				■		
248	四	6							
248	四	7							
248	四	8	■			■			
293	四	9	■						
293	四	10	■	■					
293	四	11	■						
293	四	12	■						
170	四	13	■	■					
170	四	14				■			
170	四	15			■	■	■		
170	四	16	■						
65	四	17	■						
65	四	18	■		■		■		
65	四	19	■		■				
53	五	1		2	1	1		1	2
53	五	2			■	2	■	1	
53	五	3		5		1			
53	五	4		4		2			
62	五	5		5					
62	五	6		5					
62	五	7		5					
837	五	8		5				1	
837	五	9	■	1			■	1	
837	五	10		3			■		
837	五	11		5				2	
255	六	12		3		2	2		1
255	六	13		4		2			
255	六	14		6					
255	六	15		3					
257	六	16		4					
257	六	17		6					
257	六	18		5					
257	六	19		4				2	
20	六	20		4			■		
20	六	21		5			■		
20	六	22		5				1	
20	六	23		7					
258	六	24		7					
258	六	25				1		2	
619	七	10				4			1
619	七	11		2					
838	九	24		3				1	
838	九	25		1		1		2	
838	九	26		1					

残存板木合印	合計	入木	彫りこみ
	卷一～四	362	16
	卷五～九	11	141

木は「版木製作後に訂正が必要になった場合」のそれと見ることが出来るが、巻一〜四は訂正とは到底思われぬ。つまり、巻一〜四の入木は最初に板木を彫る時に合印の箇所を意図的にとばして行き、後で一括して入木処理をしたと見るべきものである。

では、何故そのような処置をしたのであろうか。また、そのような処理が彫りの作業工程でどのような意味を持つのであろうか。先にも見ておいたように、巻五〜九は天明八年の京都大火以前に彫整されたもの、巻一〜四は大火後に補刻されたものであった。ここで問題になるのは大火の前後ということではなく、巻五〜九と巻一〜四の二群の板木が同時同一の作業工程で作られたものではなかったということである。それは版式の違いとしても認められること先に版下・目録を例にとって触れたが、それは**図版8**と**図版9**を並べてみると一目瞭然で、この合印も巻五〜九のそれはやや小さめで、巻一〜四はやや大きめというはつきりとした違いがある。つまり、巻五〜九は抄文の文字も小さめで合印もそれに合わせて文字の幅にはば見合う小ささであるのに対し、巻一〜四は抄文の文字が大きめになり、さらに合印が抄文の左右行間へはみ出しがちな大きさになっている。この違いが合印が入木かそうでないかということと深く関わっているのだと思う。彫師の立場に立つてみると、どちらが仕事し易いかは言うまでもなからう。彫師は行間がすつきりと通っていた方が刀を運び易かった筈である。その作業工程を配慮した上で天明七年の初刻時には、『山家集抄』の版下は抄文を小さめにして行間をとり、合印が行間にはみ出さぬよう

に配慮されていた。が、大火後に巻一〜四を補刻するに際し、それが編者固浄の指示なのかそれとも版下筆者の意図なのかは不明ながら、抄文も大きめに合印はさらに大きめに設定されることになった。その理由は、実際に版本に目を通してみると納得出来るのだが、巻五〜九のスタイルだと合印が小さいため抄文に紛れて見分けにくいということであったのではないかと思われる。そのように読者にとっては有難い配慮が、彫師にとっては彫りにくいという迷惑な結果を招くことになった。そこでもう一度表Ⅱの合印一覧を御覧いただきたいのだが、巻一〜四の合印でもとからの彫りこみは巻一に限られ、しかもそれが前半に集中していて、巻二〜四の合印はすべて入木処理であることに注意してよいかと思われる。それは最初彫りこみで作業を始めたものの仕事やりにくく、途中から方針を変更し、後での一括処理に切り替えたという事情を暗に物語っているかのようなのである。以上のように、『山家集抄』巻一〜四の合印の入木は、彫りの作業工程の効率化を優先した、一度板木を彫整した後での一括処理であったと考えられる。が、一括処理とは言え、それは合印の入木を大量にこしらえておいて機械的に入れるという単純なことでもなかったらしい。その例をいくつか挙げてみよう。図版14は巻一6丁表の部分。△印を上上の匡廓の一部と下の「春」の一部に掛けた入木である。同様な入木が、巻二4丁裏（△印を下）の「今」の一部に掛ける、巻二15丁裏（△印を下）の「な」の一部に掛ける、巻四10丁表（△印を上）の匡廓の一部に掛けるにも認められる。図版15は巻二1丁裏の部分。○と△を重ねた入木

が二箇所あり、左側の方は△の左隅を切つてある。因みに、△と△を重ねたスタイルの合印は全巻を通じてこの二箇所だけ。ある程度の機械的な処理も可能だったかも知れないが、これらの入木はいずれもその該当箇所のためにだけ仕立てられた入木である。そのような煩瑣とも思われる工程を踏んでも、最初から彫りこむよりも後で一括処理した方が全体の効率はよかつたのであろう。因みに、**図版7**に示したように、巻三丁裏には合印が必要なのに空白になっているところが二箇所ある。抄文7行目「風ふけど」の上には△が、13行目「吹風の」には△が入るはずで、その分の余白がある。板木が残っていないので確認のしようがないのが甚だ残念であるが、これは入木処理をうっかり落としたのであろう。

なお巻五九の合印の入木は、△が一箇所、○が二箇所、△が八箇所、△が最も多い。この△のうち巻五10丁裏のケースは、**図版16**のように、もとから彫りこんであつた△の左肩に部分的に入木して△に改めたものである。また巻五9丁表の板木には合印の入木がはずれてしまつているところが一箇所あるが、版本で見ると△印が入つてははず。これらを手掛かりにして考えると、△の入木はもとはすべて△であつたものを部分修正また全面修正したのではないかと思われる。いずれにせよ巻五九の合印の入木は作業工程の効率化に伴つて行われたものではなく、板木彫整後の見直しの際に修正した入木であつたと考えられる。同じ合印の入木でも、巻一四と巻五九では、性格が全く違つているのである。

### 3 序巻漢文体の入木

さて、「山家集抄」には巻一四の合印と同様、彫りの作業の効率化に伴い一括入木をしたところがある。それは、序巻3丁表から5丁表半ばにかけての「西行法師贊」(艸蘆龍公美述)と「西行聖人伝」(不可思議撰)で、**図版10**に3丁表を原寸で示したようにこの部分は漢文体である。したがって返り点・送り仮名・ルビ・音訓読符号が夥しく施されることになり、いまその数を数えてみると僅か2丁半の間に五百三十三ある。**図版10**からも判るように、縦横2耗前後の大きさで、ルーベを使用しても判然としない箇所もあるが、板木を仔細に検分してみると、ここに施された返り点・送り仮名・ルビ・音訓読符号はどうやらすべて入木であるらしい。入木の様子がよく分かるところを**図版17**(4丁裏)・**図版18**(5丁表)に挙げておこう。漢文表記はどうしても送り仮名が右の、返り点が左の行間にはみ出してしまうことになり、彫りの仕事のしにくさはおそらく先の合印の比ではない。そこで本文は本文で先に彫っておき、後で返り点・送り仮名・ルビ・音訓読符号を入木で一括処理で行なつたと考えるべきであらう。僅か2耗ほどの入木五百三十三個をこしらえて、それを一つ一つ板木本体に嵌め込む作業は考えただけでも気が遠くなりそうであるが、それでも最初から板木に彫りこんで行くよりは全体の作業効率はよかつたのだと考えざるを得ない。因みに記せば、序巻にはこれ以外にも返り点・送り仮名・ルビ・音訓読符号を伴う漢文挿入箇所が少なくはない。いまその箇所をおよその行数で列記してみると、7丁表1

行・18丁裏6行・19丁表6行・20丁表11行・25丁裏1行・29丁裏1行・30丁表2行・30丁裏2行・31丁裏2行・33丁表3行で、合計35行ほどある。このうち19丁・20丁・33丁は板木が残らないので判らないが、他は板木で確認してみると、こちらの返り点・送り仮名・ルビ・音訓読符号は全て最初からの彫りこみで、入木ではない。

## 六 他の例

では、「山家集抄」のように彫りの工程を効率化するために、一度板木を彫整したあとで、入木を一括処理した例は他にあるのだろうか。これについては、俳文学会第58回全国大会開催を記念して平成十八年十月十日から十一月十日まで奈良大学通信教育部棟（現奈良大学博物館）展示室で行なった板木を中心とする出版史料展「出版の現場から」の展示目録解説で、この「山家集抄」と共に少し触れたことがあるが、漢文の例としては狂詩集「毛護夢先生紀行」が挙げられる。該書は、明和八年八月竹苞楼佐々木惣四郎の刊。もとは四丁張り五枚であったと思われる板木が二丁張りに裁断して残っている。残存板木は二丁張り五枚で、該書の3く6丁と9く14丁の合計十丁分である。狂詩集であるから当然漢文表記になるのだが、この板木にもやはり夥しい入木がある。もともと「毛護夢先生紀行」の場合、「山家集抄」の「西行法師贊」「西行聖人伝」のように返り点・送り仮名・ルビ・音訓読符号を全て入木としているのではない。全体的には最初から彫りこんで

あるものの方が多く、また入木も概ね送り仮名・ルビに限られている。その一例を示そう。図版19・20は11丁表の一部。図版19二行目の「財（財）」の「モ」、「少」の「ナ」、「連」の返り点「一」が入木で、他は全て彫りこみ。図版20は一行目のルビ・送り仮名が全て入木で、二行目は「安」の「シ」及び「眠」の「ル」が最初からの彫りこみで、他の送り仮名は入木である。いま、白蟻に食みつくされて殆んど刻面の残らない5丁を除く残りの9丁について調べてみると、送り仮名・ルビの入木が二百二十一箇所、返り点などの入木が十箇所、合計二百三十一箇所となる。これもやはり修正という範囲で収まるような数量ではなく、後で補うことを前提とした入木と見るべきであろう。先の展示目録に「微細なルビなどは、彫れるところは彫って、彫りにくい箇所とはばして行き、あとで入木で補ったのではないかという印象を受ける。そうするほうが、職人は仕事がし易かったのかもしれない。」と述べたが、そのように考えざるを得ないのである。なお、「山家集抄」の合印の入木に類似した例としては、文政堂蔵の「高野版」（現当主藤井佐兵衛氏談）の經典の板木、「山家集抄」「毛護夢先生紀行」と同様竹苞楼旧蔵の明治期刊「標注文章軌範纂評」の板木に微細な○印を一括入木したと見られる例もあり、今後さらに調査を進めて行けばいくらかでも出てくるような気がしている。

以上、「山家集抄」の残存板木を中心に、彫りの作業工程効率化のため合印や漢文の返り点・送り仮名・ルビ・音訓読符号など彫りにく

いところを後で一括処理するという入木の手法があつたことを見て来たのであるが、大量の板木を眺めていると、入木にはまだ他にも幾つかの使い方が分かつて来ている。が、それについては、また機会を改めて紹介することにしよう。

平成十九年八月晦日 記

\*この稿は平成十八年度奈良大学研究助成に拠るものである。

図2 題簽 (X0.5)

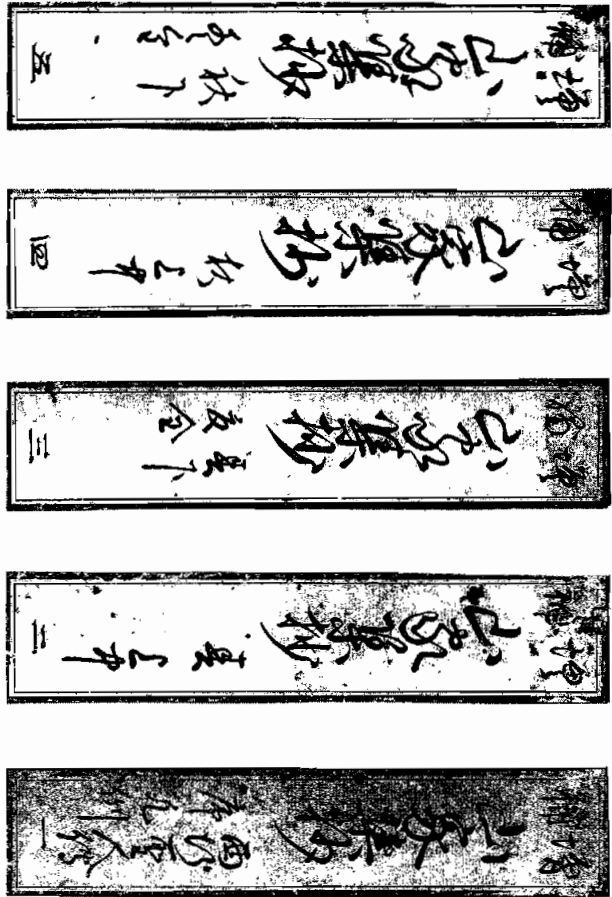


図1 序巻表紙 (原寸X0.35)



図3 板木245番拓本 (X0.25)



図5 同右 部分 (原寸)

△水き流川 みろせの男 水き流川  
 山の西山竹の南に遠方知園  
 くののづらひぬくゆくとら道  
 みるくわねくあまを遠て舟  
 流すすけいとはゆ下置(上)  
 流すおとけし下置(下)ぬのた  
 りてんとけし下置(下)ぬのた  
 うねり  
 △度津川 みろせの男 水き流川  
 山の西山竹の南に遠方知園  
 くののづらひぬくゆくとら道  
 みるくわねくあまを遠て舟  
 流すすけいとはゆ下置(上)  
 流すおとけし下置(下)ぬのた  
 りてんとけし下置(下)ぬのた  
 うねり

図4 卷四11丁裏 (X0.5)

△水き流川 みろせの男 水き流川  
 山の西山竹の南に遠方知園  
 くののづらひぬくゆくとら道  
 みるくわねくあまを遠て舟  
 流すすけいとはゆ下置(上)  
 流すおとけし下置(下)ぬのた  
 りてんとけし下置(下)ぬのた  
 うねり  
 △度津川 みろせの男 水き流川  
 山の西山竹の南に遠方知園  
 くののづらひぬくゆくとら道  
 みるくわねくあまを遠て舟  
 流すすけいとはゆ下置(上)  
 流すおとけし下置(下)ぬのた  
 りてんとけし下置(下)ぬのた  
 うねり

図7 卷三7丁裏 (X0.5)

この擇らぬて...  
 風...  
 吹...  
 人...  
 大...  
 未...

図6 卷九15丁裏 部分 (原寸)

け...寛平元年十一月より...  
 社...  
 全...  
 中...  
 殿...  
 子...  
 考...  
 五...  
 造...  
 内...







図10 序卷3丁表（原寸）

## 西行法師贊

艸廬 龍公表 述

半千、不餘年前、獨有風流之士藤、儀清改西行孺子、尚熟其耳、公在昔白衣時、故鄉辭來朝仕、能達武能達文、無恥勇之與、智最長於作詩、才妙契于公、旨主上大、喜得人親愛、無與等類、家門多幸、榮華衆人誰不覩、觀世相、無常篤信、夢幻、喻譬、秋夜坐月、傷心、奈何塵緣、難避、一旦遂捨妻兒、割愛永歸、釋氏、除綠髮披緇衣、深自歎、遂素志、從此孤漂、子身從容、無復繫累、周遊天下、州郡、蹤跡、殆比雲水、賞花月、於寐、寔訪聖賢、於幽邃、公嘗遊化鎌倉、見將軍叙習技、終夜清譚、厚、濃、將軍多謝、教示、翌日告歸、去來慙、勸畱而不止、深為愛惜、別離、贈以一小窰器、公輒受、不敢辭、出門即捨遊雅、熟見哲人行蹤、不求名、不貪利、求名須不頓、容貪利豈可輒、弄文、覺亦豪傑、僧始薄、公以浮戲、一見風度、不凡、方悔前念、非是、苟非積厚、養、暖、感、動、人、難、至此、得佛道於國風、感神託於文、

図13 卷六12丁表の板木（部分）

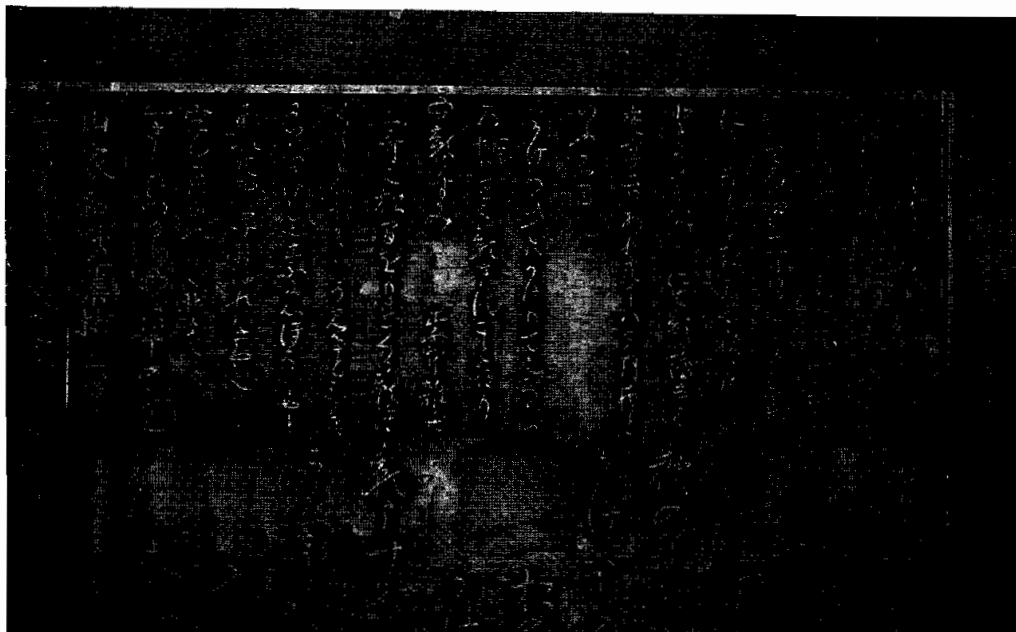


図11 刊記部の板木（部分）



図12 巻一11丁裏の板木（部分）

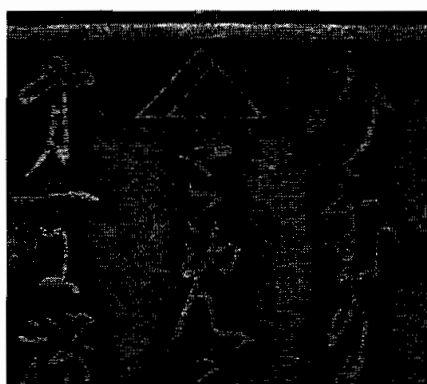
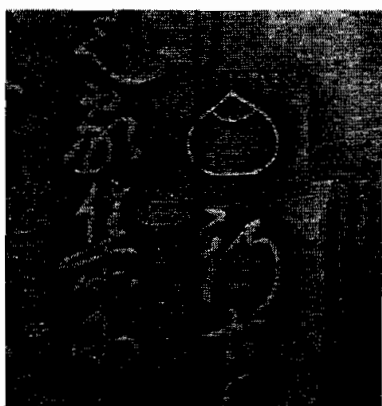
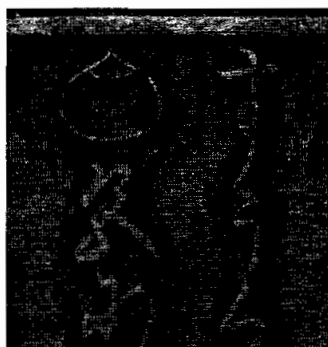
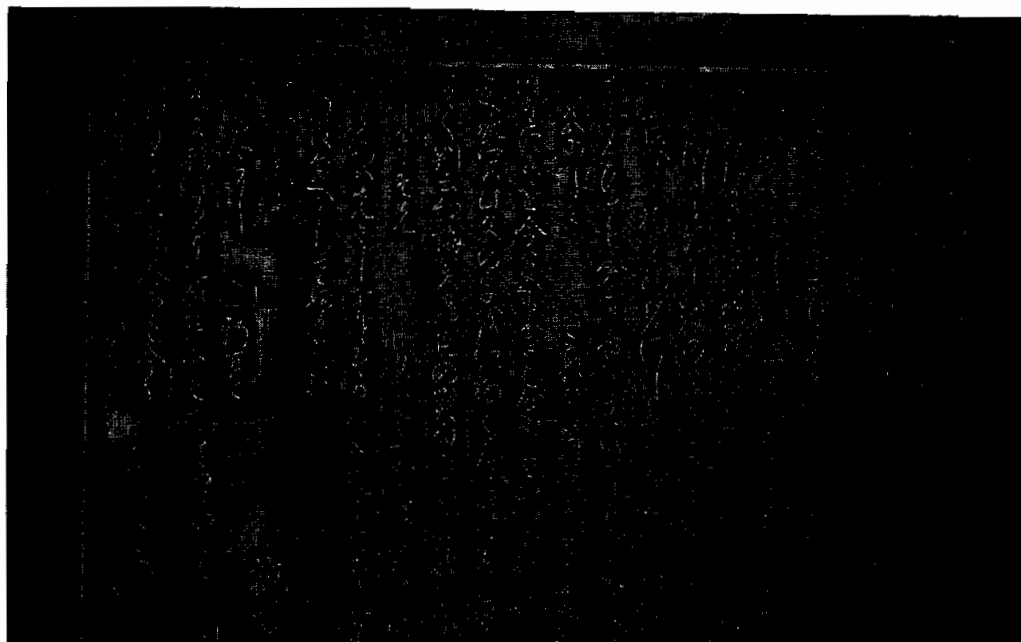


図14 巻一6丁裏の板木（部分）

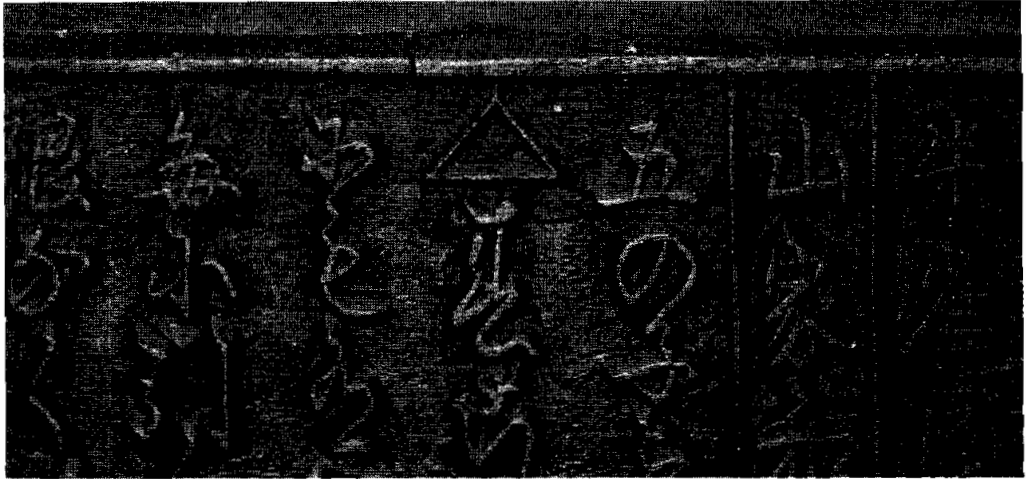


図15 巻二1丁裏の板木（部分）



図16 巻五10丁裏の板木（部分）



図18 序巻4丁裏の板木（部分）

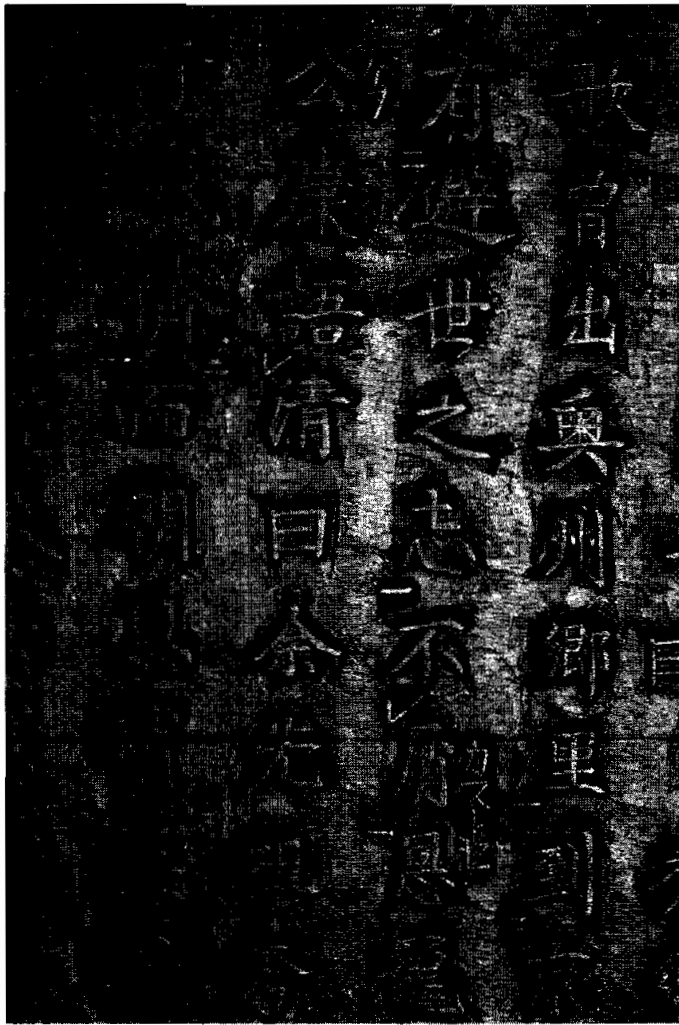
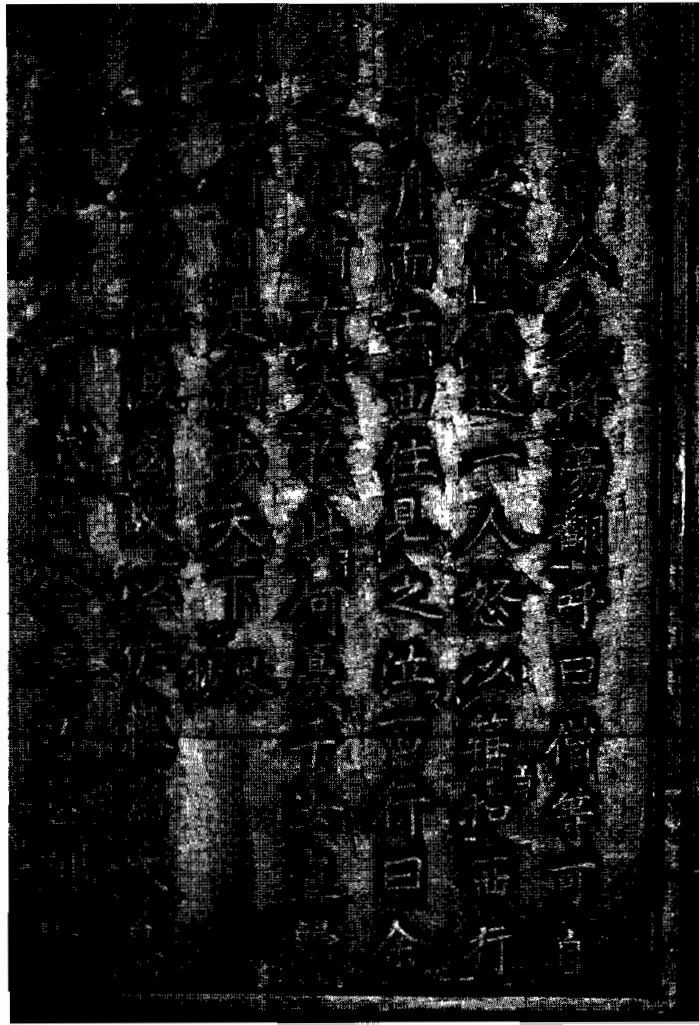


図17 序巻5丁表の板木（部分）



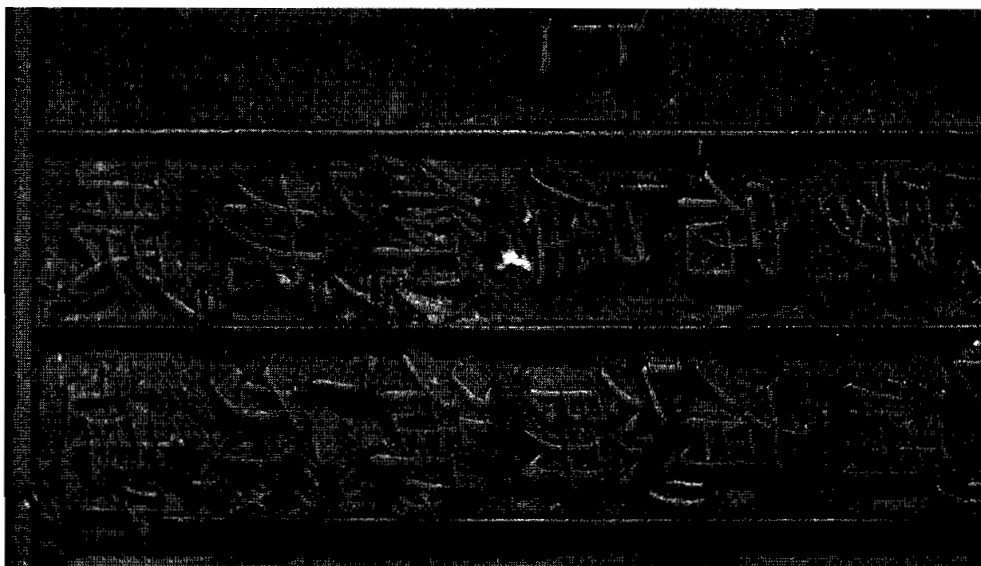


図20 同右

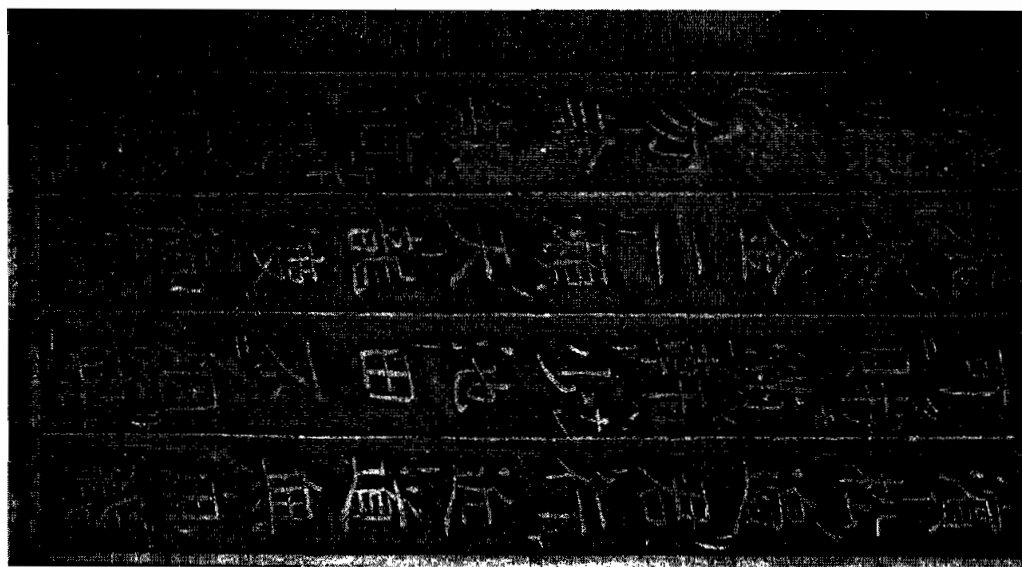


図19 「毛履夢失生紀行」11丁裏の板木(部分)



**Printing Block Parts of *Sankashū-shō***

Kazuaki Nagai